

発刊にあたって

令和4年1月14日（金）、午後2時から、川越市、川越市教育委員会、川越・東松山人権啓発活動地域ネットワーク協議会主催により「川越市人権問題講演会」を川越西文化会館（メルト）ホールを会場に開催いたしました。

ここに、講演会における瀬瀬あや先生（映画監督）の講演内容を要約し、概要版として発行することといたしました。

つきましては、人権問題についてより一層の理解を深めるために、本冊子をご活用いただければ幸いです。

令和4年3月

瀬瀬 あや 氏 プロフィール

東京生まれ。自由学園卒業。

2001年ポレポレタイムス社に入社。

本橋成一監督の『アレクセイと泉』（'02年）、
『ナミイと唄えば』（'06年）の映画製作に携わる。

'10年に上関原子力発電所に反対し続ける島民の暮らしを映し撮った映画『祝の島（ほうりのしま）』を初監督。
シチリア環境映像祭で最優秀賞受賞。

大阪府貝塚市の北出精肉店の家族の暮らしを描いた
二作目『ある精肉店のはなし』（2013年）は釜山国際
映画祭、山形国際映画祭招待作品。ニッポンコネクション
（フランクフルト）ニッポン・ヴィジョンズ観客賞、
第5回辻静雄食文化賞、平成26年度文化庁映画賞文化記録
映画部門大賞を受賞。

現在は、日本の移り行く時代の中で消えかかっている
人々の営みを映像に撮り続けている。

講演内容（概要版）

【ドキュメンタリー映画を作るようになった経緯】

20歳で短大を卒業して会社員になり、半導体商社に勤め始めたが、仕事はとても充実していたものの、このままでいいのだろうかと疑問が湧き、会社を退職して自分の興味が向くままにいろいろな仕事を経験した。

その中で出会ったのが写真家で映画監督の本橋成一氏で、同氏の事務所に入り写真の展示やドキュメンタリー映画の制作に携わるようになったが、その時は自分が映画監督になるということは全く考えていなかった。

映画監督になるきっかけは、本橋成一氏の事務所にいるときに、仕事で山口県にある祝島に訪れたことだった。

祝島の人たちは、上関原発の建設計画が持ち上がった1982年から反対を続けている。祝島の方たちが何に反対しているかではなく、何を大切にしているのかということを目で見てみたいと思った。そして、祝島の人たちが日々見ている世界や風景、そこから見えてくる原発とはどういうものなのかを知りたくなった。

それは、マスコミの報道では取り上げられることはないだろうということで、自分で映画を作ることを決意して祝島に通い始め、撮影したものが、監督第1作目となる「祝の島」（ほうりのしま）という映画になった。

【屠場（牛や豚などの家畜を解体する場所）との出会い】

本橋成一氏が屠場の写真を撮っていたつなかりで、屠場を見学させてもらえることになった。

自分が食べるもので、米・野菜・鶏肉・魚までは生きている姿から食べ物になる過程を見たことがあったが、牛肉・豚肉については、日常的に食べているのに、その出どころを一度も見ることがないことがずっと引っかかかっていて、もし機会があればぜひ見たい、一度は見てみなければいけないのではないかとずっと思っていた。

屠場で最初に見学したのは、牛の眉間に打撃を与えて気絶さ

せ、その間に頸動脈を切って放血（全身の血液を抜く）作業だった。

牛が倒れ込み、まさに目の前で一つの命が終わるその瞬間に立ち会い、自分の心臓をわしづかみにされるような衝撃があった。これが自分の食べるに繋がっているのだと全身で納得した。

更に時間が経つと、自分はこの瞬間を無自覚に人に委ねて物を食らって生きてきたのだという、これまでの自分に対する大きく鈍い衝撃が襲いかかってきた。

今まで「いただきます」というのは、命に感謝しての「いただきます」だと十分自覚しているつもりだったが、何も分かっていなかったという感覚になった。

その後は、皮を剥ぎ、内臓を出して、枝肉にしていくという作業が淡々と続いていく。

見学を終えたときには、自分の中での屠場で働く人たちに対する印象が180度変わっていた。どこか怖い感じの人たちではないかと勝手に思い込んでいたが、目にしたのは、「自分たちは美味しい肉を作り出している」という、職人の気概、気合に満ちた人たちだった。

屠場という場所は、死を連想して、霊安室のような冷たい場所だと思い込んでいた。しかし実際には、そのひとつ手前、命ある牛・豚と、命ある人間が対峙している場所で、そこには日常の空間には無いような、濃密ないのちのエネルギー、熱が充満していた。

私のようにこの仕事をきちんと見ることができれば、多くの人たちが屠場の仕事に対するイメージを変え、そこから大切なものをたくさん受け取ることができるのではないかと感じた。それ以来、いつか屠場にまつわる映画を作りたいと思うようになった。

しかし、実際には、屠場の仕事を映像化することは困難であると分かっていた。理由として、一つ目は、映像で生死を直接的に扱うということが非常に難しいということ。二つ目は、屠場の仕事が被差別部落の産業として担われてきたという歴史があり、それを踏まえた上で、屠場で仕事をする人たちの姿を描くということも大変難しいということがある。

【北出精肉店との出会いと映画制作を開始するまで】

屠場にまつわる映画を作りたいと考え始めてからしばらくして、大阪の知り合いから北出精肉店の話を聞いた。大阪府貝塚市の町の中に、一見すると普通のお肉屋さんだが、裏手にある牛舎で肥育して、成牛になった牛を機械化されていない徒歩5分の所にある屠場に連れていき、そこで家族4人で解体し、持ち帰って自分の店で販売をするということだった。

それは行かなければと思ったが、その話には続きがあり、北出精肉店が代々利用してきた貝塚市立屠畜場は半年後に閉鎖することが決まっていた。映画にするには間に合わない諦めていたが、閉鎖する前に公開屠畜見学会が行われることになり、「屠畜解体の仕事の様子を映像で記録させてほしい」とお願いし、北出さんたちの了承を得て撮影させてもらうことになった。

そこで北出さんたちとのやり取りは終わるはずだったが、見学会から東京に帰る新幹線の中で、これは絶対に映画にしなくては行けないと強く思っていた。

なぜ映画にするには北出さんたちしかいないと思ったのかというと、見学会後に参加者たちから「素晴らしかった」「作業が美しかった」「すごいですね」等の感想が出た。それに対して北出さんたちは、「特別なことではないし、すごいと言われるような仕事でもない。普通の仕事だと思っている。でも、蔑まれるような仕事でもない。生きるため、食べるために必要だから自分たちはやってきた」と言った。それを聞いた時、頭ががつんと殴られたような衝撃を受けた。やはり私も特別な仕事だと思っていて、特別な人がやるもの、特別な場所であると思っていた。だから、それを映像化してやろうという思い上がりがあったことに気づき、とても恥ずかしかった。

当たり前前の仕事である、北出さんや屠場で働く人たちにとっては日常の仕事であるということ。そこからだったら、初めて屠場の仕事を真っすぐに見ることができるのではないだろうか、そして、それを一緒にしてもらえるのは、北出さんたちしかいないと思った。

屠場が閉鎖されるまでに残された半年の中で、何とか映画にする方向に持っていくために、北出さんたちがいる町に通い始

めた。「日常」を描くためには、北出さんたちの仕事、家族、歴史、そして町の人たちとの関係も映像化することを考えたので、まずは地域の了承をいただくために地元の部落解放同盟の役員と北出さんたちと何度も話を重ねた。

最初はなかなか了承してもらえなかったが、通い続けるうちに、「もし問題が起きたときには、逃げずにその現場に一番に駆けつけ、問題を解決するために一緒に考えて乗り越える」ということを約束し、やってみましょうと言っていた。

目の前の扉が開いた瞬間だった。自分が考え得ることを全てやりつくそうという思いで映画制作をスタートした。

【映画の完成と評価】

北出精肉店から徒歩5分のアパートの部屋を借りて、撮影がないときでも、毎日のように北出さんのところにお邪魔して、およそ1年半かけて完成したのが「ある精肉店のはなし」という映画である。

映画を撮影する上で思い悩んでいたことは、部落差別をどう映像化すれば良いかということだった。差別の経験談はたくさん聞いたが、差別を可視化することはとても難しく、差別を受けたと感じた瞬間の、全身が凍りつくような痛みなどは到底映像で表現することはできないと悩み続けた。

しかし、撮影が終盤に差しかかったときに、自分は差別を映像にしたいと思って映画制作を始めたのではないと気づいた。差別を撮るのではなくて、差別や偏見の余地がないぐらいに彼らを真っすぐ見て、私の目に素敵に見える彼らの姿や風景を直球で表現していくということの良いのではないかと思うようになった。

映画が完成してから8年になり、いまだに映画の上映会で全国を回っているが、驚くほど好評をいただいている。屠場の仕事や被差別部落について正面から捉えている作品自体が少ないことや、北出さん一家や町の人たちの姿に心強くひかれる方が多かったことが、好評をいただいている理由だと思う。

【差別をなくすために】

この映画を全国各地で上映していく中で、映画を観に来てくださった屠場や食肉産業に従事する方と話しをする機会も多くあったが、行く先々で、何度となく同じような話を聞いた。それは、屠場で働いていることを人に言うと、相手から大概「残酷ですね」と言われるのだという。そう言われると二度と言いたくないと思うのだ、という話だった。

おそらく「残酷ですね」と言った人に悪気はなかったのだろうと思う。しかし、「残酷」という言葉のニュアンスには、まるで人ごとというところがあったために、言われた側は傷つき嫌な思いをするのだと想像する。

では何が残酷かと言うならば、突き詰めれば、それは食べることではないだろうか。食べる人がいるから屠畜の仕事が必要であり、それを担っている人たちがいる。

もし「残酷」と言うならば、それは日々物を食らって生きている自分に対して向けられるべき言葉ではないだろうか。そして物を食べることは、ここに集まる全ての人が等しくしている行為である。

差別をなくすためには「学ぶこと、知ること」が大切であると思うが、それだけではまだ足りないだろう。頭では差別は良くないと分かっているとしても差別はなかなか無くならない。

それに合わせて重要なことは、自分の肉体・五感を通して物や人や場所と出会い、自分と相手の世界がつながるという実感を持つことではないだろうか。それが差別をなくしていくために大切なことではないかと思う。